

京都大学大学院訪問報告

1. 日 時 平成29年11月8日（水） 14:00～17:10
2. 参加者 1年生SGH生徒22名
3. 訪問先 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科グローバル地域研究専攻
4. 場 所 京都大学研究棟2号館4階 大会議室
5. 内 容

(1) 挨拶、

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は学部を持たない研究科である。様々な大学の学部から学生が集まり、おもに東南アジア圏の研究を深めたいとおこなっている研究集団である。

(2) ゼミ発表

①タイトル：「世界中に離散したアフガニスタンの知識人」

発表者：桐原 翠 さん

発表内容：

世界で国外流失が多い国トップ3はシリア、アフガニスタン、南スーダンである。流出理由の多くは内戦によるものである。流出先は世界各地になる。流出は継続的だが、ソ連侵攻時と同時多発テロ時にピークがあった。流出先ではレストラン経営、生地や絨毯販売、医師等で活躍。離散先での生活模様はよそ者扱いされることが多い。ただ、今までと異なる環境に置かれることで、自然と新しい思考がうまれることになる。

イスラムのイメージテロ等負のイメージが定着しつつあるが、実際はイスラムの教えである共生していこうという考えが主流である。イスラム金融という考え方がある。イスラムの教えにのっとった無利子でお金を回すというものである。一般的に世界の各地に離散した人はかわいそうな人と考えられがちであるが、直接出会って話を聞くことで本当の姿が見えてくる。実際にあって話を聞いてみると、苦労はあるが、現地で幸せな生活を送っている。そんな人たちがイスラムと非イスラムとの架け橋となるのではないかと考える

②タイトル：「アゼルバイジャン地域と人々」

発表者： 岩倉 さん

発表内容：

アゼルバイジャンは社会主義政権消滅後も宗教を強制的に管理。2025 アゼルバイジャン万博に立候補しており、バクー油田が有名である。公用語はアゼルバイジャン語である。ロシア語も通用する。人口970万人である。おもな宗教はイスラーム教で、シーア派8割、スンナ派1.5割のような割合である。

石油天然ガスが輸出の9割であり、パイプラインで輸出をおこなっている。
ナゴルノ=カラバフ問題を世界史で学習すると思う。ナゴルノ=カラバフ問題とは領土紛争アルメニアとアゼルバイジャンの紛争のことである。現在でも宗教管理がおこなわれている理由はソ連時代の社会主義教育の影響と国家体制維持のためといわれている。2001年宗教問題を管理する政府機関が発足。宗教団体担当国家委員会は全ての宗教を対象とし、宗教活動等を監視管理している。カフカースムスリム宗務局はイスラムの法学者がイスラムについて管理している。上記の団体は民間団体だが、事実上は政府組織に近いものとして活動している。宗教を管理している面は宗派共存を謀ることができる急進的イスラームの抑制をおこなえる。国家支援の文化保護が徹底できる。

悪い面は、信教の自由の侵害。結社の自由の侵害。国家による宗教操作。アゼルバイジャンは複雑な歴史と地域情勢によって多様な文化や制度が育まれてきた。宗教管理は深刻な人権侵害もある一方で、地域の宗教共存に影響。

③タイトル：「インドファッションとアパレル産業」

発表者： 川中 薫 さん

発表内容：

アパレル産業からインドの文化、社会、産業の特殊性と普遍性を考える。特徴製品により市場や生産が混在。ローエンド 大量安価。ハイエンド 少量高価。本研究では中間からハイエンド製品に着目した。デリーにおける独自の市場や生産のあり方を通して今後の可能性を検討。インドのアパレル産業の面白い点、市場の多様性。リバースイノベーション インドで採用されたイノベーションが先進国に採用されている。地域性 社会的文脈とのつながり。グローバル化と近代ファッションの融合により新しいデザインが生まれる。ソフトコンテンツを充実したクリエイションの可能性を検討していくことが必要。新たな発想 インターフェイスとしてのファッションに着目。ハードコンテンツからの検討。伝統を評価しつつ、新たなものを生み出しているが、近年のインドのアパレル産業で多くの世界のトップブランドや大手アパレルメーカーからも熱い視線が送られている。

(3) 質疑応答

Q：アフガンの離散した人々が現地で販売している生地は？

A：現地のアフガン人

Q：アフガンの離散の2つ目の理由となった同時多発テロとの関係は？

A：同時多発テロの犯人探しの掃討作戦の影響を受けた。

Q：イスラム教のスンナ派とシーア派の違いは何か？

A：アリーこそがイスラム世界と考えているのがシーア派。

アリーを重要視しないのがスンナ派

Q：アゼルバイジャン政治が形式的とはどういうこと

A：大統領の意向が尊重されていることが形式的といえる

Q：アゼルバイジャンと日本の関係

A：近代以降関係が生まれる。日本は石油を輸入、農業技術を現地で指導等。関係はそれほど深くない。

Q：アゼルバイジャンの日本人居住数

A：現地居住者数は1000人未満。

